九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学蔵「島田家資料」目録考 : 諸家自筆詩文箋の部

大庭, 卓也
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9363

出版情報：語文研究. 90, pp.28-45, 2000-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

九州大学蔵「島田家資料」目録考

――諸家自筆詩文箋の部――

大庭卓也

一　はじめに

九州大学附属図書館には、徳山藩儒島田藍泉（宝暦元年～文化六年）の遺物が所蔵されている。それらは藍泉のもとに諸家から寄せられた詩箋、書簡類を中心とするもので、総点数は五百余点にものぼる。現在は本学文学部貴重書庫に配架されており、その内訳を図書館が与える分類によって掲げると次のようになる（括弧内は請求番号）。

イ　亀井南冥・曇栄遺墨　一括（支哲／52／120）
ロ　亀井昭陽遺墨　一括（支哲／52／121）
ハ　島田藍泉遺墨　一括（支哲／52／122）
ニ　島田藍泉交友関係遺墨　一袋（支哲／52／123）
ホ　原古処其他遺墨並書翰　一袋（支哲／52／124）

分類名の「一括」「一袋」などの語が示しているように、これらは細かな整理がされぬままに保存されてきており、勿論その細目が公開されることもなく、イ～ホの分類の境界さえも十分につきかねる状態にあった。ただ資料の多くに裏打ちが新たに施されており、ために虫害を比較的免れていることは幸いであった。

そうした状況のなか、平成十一年の夏、これら資料群を本学が所蔵するに際して尽力された、本学名誉教授荒木見悟先生の手で個別資料のあらましが分類された。その後、筆者は本学中国哲学史講座の柴田篤教授より、この作業を承けて詳細な分類整理をする機会を与えられ、以来、目録の作製を期して作業を進めてきた。その結果、右の図書館が与える分類は資料の内容を十分に反映するものではないこと、またこれら資料群には、近世中後期の漢詩文壇の一側面を窺うための好個の資料が含まれることなどが徐々に判明してきた。本稿では、資料群の来歴、および現状における問題点を検討する

とともに、諸家自筆詩文箋の目録稿を報告することとしたい。

二　その出処、旧蔵者など

これら資料群の出処、および本学がこれらを所蔵するまでの経緯については、荒木見悟教授『亀井南冥と役藍泉』（徳山市立図書館双書　第十集　昭38）の「まえがき」に明らかである。そこには、昭和三十一年、当時の本学中国哲学科の楠本正継教授を中心とする研究グループで、文部省科学研究費による「九州儒学思想研究」が始められ、その一端として荒木教授が亀井南冥の研究を担当することとなり、南冥と親好のあった徳山藩儒島田藍泉の資料を渉猟するうち、藍泉の末裔宅に残る資料を見出したことが次のように記されている。

…その中兵庫県伊丹市に藍泉の曽孫島田乾三郎翁を訪ね、御秘蔵の南冥・昭陽書翰初め貴重な資料の数々を繙閲する機会を持つことが出来た。私が島田家を訪問したのは前後四回にも及んだであろうか。八十余才の高齢で歩行も不自由な翁であったが、常に弱輩の私を快く招致され、私のしつこい質問に、あくこともなく説明をくりかえされるのであった。この不思議な学縁がもととなって、遂にこれらの資料は、九州大学の所蔵に帰することとなった。翁の言に依ると、教学院関係の修験道資料は京都大学に、藍泉の詩文集類は徳山市立図書館に、夫々おさめられた由であるから、結局島田家資料は全国三カ所に分置されているわけである。これらを総合的に調査するならば、藍泉及びその周辺の事情が一層明らかとなるであろう。…

即ち、本資料群は藍泉の遺物として代々島田家に伝えられていたものであり、それが島田乾三郎氏によって本学に寄贈されたのであった。右に言う、京都大学・徳山市立図書館に寄贈されたものとは、前者は「島田文庫」として同大学附属図書館に所蔵される修験道関係資料二百三十四冊であり、後者は藍泉の詩文稿本類を含む徳山教学院関係資料七百三十点である。従って、本稿でも九州大学が所蔵する資料群を荒木教授の言を借りて以下、「島田家資料」と呼んで論を進めることとする。

島田藍泉については、近時刊行された荒木教授の『島田藍泉伝』（ぺりかん社　平12）に、主として思想方面からの詳しい考察が備わるが、ここにその伝を略述しておけば凡そ次のようになる。字は道甫、通称は右京、号興山。役小角の法流を承けて修験道を奉じたため、役氏を姓とする。徳山教学院の住持を勤めるかたわら、服部南郭門の国富鳳山・瀧鶴台に就いて徂徠学を修め、のち徳山藩藩校鳳鳴館の教官に任ぜられている。徂徠学を奉じたことから福岡藩儒亀井南冥と意気投合し、その親交は南冥没後はその男昭陽の代まで続いてい

る。「島田家資料」内に南冥、昭陽の詩箋や書簡が抜きんでて多く残る所以である。著述に『藍泉詩集』初・二編（十三巻五冊）、『藍泉文集』初・二編（二十六巻十二冊）などの詩文集、また『藍泉漫筆』（一冊）、『藍泉新語』（一冊）などの随想様のものがある。いずれも写本で伝わるものであるが、刊行されたものとしては没後の文化十三年に門人の手によって編輯された『藍泉集』（三巻三冊）がある。

一方、近世漢文学研究の立場から藍泉の足跡を考えると、その職務柄、吉野の大峯山に入山する度に京坂の諸儒と接触する機会を得ていることが注目される。藍泉の大峯入山は明和六年から晩年まで、ほぼ毎年続けられたが、主としてその青年時、即ち明和・安永頃に京坂を歴訪して、文学的刺激を大いに受けていたことが『詩集』『文集』の言辞から知られる。この時期、もう少し厳密に言えば宝暦～安永期の京坂では、護園古文辞派の詩文愛好の風が定着して漢詩文壇が活況を呈していた。その特徴的な現象は、第一に詩文を媒介とした文学結社である「詩社」が陸続と結成されたことに見られる。具体的に言えば、寛保・延享の交に龍草廬が京都に催した幽蘭社を初めとして、服部蘇門の長嘯社、江村北海の賜杖堂、金龍敬雄の南社、大江玄圃の自習塾、そして片山北海が大坂に催した混沌詩社など。第二に、これらの詩社ではそれまでの護園古文辞の明詩模倣の詩風が徐々に批判されはじめていたこと。こうした現象が、宋詩が重視される近世後期詩壇に向けての進展に大きく係わっていたことは、中野三敏「三都・地方における漢学の状況」（中国文化叢書『日本漢学』所収　大修館書店　昭43）、多治比郁夫「詩人の誕生――幽蘭社・賜杖堂・混沌詩社」（『日本の近世12　文学と美術の成熟』所収　中央公論社　平5）などに詳しい。藍泉の文学説は、明詩模倣に終わる護園末流を批判して、荻生徂徠の詩文にいま一度回帰することを主張するもので、これは古文辞を根底に据えながら、一方で京坂詩壇で行われていた主張をうまく取り入れて再構成したものと見做すことができる。詩壇思潮の転換期にあって、古文辞が微妙にその姿を変えながら根強く残ってゆく様を、藍泉の文学説に見るべきであろう。叙上のようなことを、『詩集』『文集』や「島田家資料」を用いながら考察したものに、拙稿「古文辞流詩学の残照」（「懐徳」第六十九号掲載予定）がある。併せて参照されたい。

ことほどさように、藍泉は文学にも心血を注いでいたのであるが、「島田家資料」は諸家から寄せられた自筆詩文箋がその多くを占めるのであるから、京坂のような中央詩壇との関係、また周防詩壇、南冥などを主とする九州詩壇との関係など、藍泉の文学活動を考えるうえで恰好の資料群であり、この点に資料的意義が認めらるであろう。以上、「島田家資料」の出処および旧蔵者について述べた。では次に、叙上の事柄を踏まえて「島田家資料」の現状に関する問題点を、解決し

得ないものも含めて以下に二、三述べておく。

まず、前節冒頭に掲載した図書館の分類のうち、ニ「島田藍泉交友関係遺墨」、ホ「原古処其他遺墨並書翰」にもともと含められていたと思われるものに、藍泉の追悼詩を記す諸家自筆詩箋四十五点が存在すること。これらの大半は藍泉の門人たちのもので、それら詩序の文言を拾ってゆくと、藍泉の没年に賦されたものから十三回忌のものまでが存在する。これらには、正面に「藍泉様／御逝去ノ節門人追悼之詩／同御自筆もの」と墨書される包紙（縦三十九・五糎、横五十三・一糎）が残る。「藍泉様」と敬称を用いるところから見て、これは後に補われたものではなく、元来、追悼詩はこの包紙によって独立して保存されてきたものである。従って原態を重視するならば、新たに「島田藍泉追悼詩」の分類を設ける必要があることとなろう。猶、因みに言っておくと、分類ホに原古処の名を掲げるのは、古処の遺墨が多く残っているからではない。古処の自筆詩箋は「島田家資料」中に一点のみ存在しており（後掲目録番号69）、著名な古処の名を分類名として採用したものであろう。

また、分類ハ「島田藍泉遺墨」に相当するものが現状においては見出されないこと。「一括」と記されるからには、もと複数存在したように解されるが、筆者が整理に着手した時点では、一点も見られなかった。但し、文学部の一般図書を配架する書庫には、藍泉の自筆扇面が蔵されている（請求番号・30／54）。「雨後前月」と題する七言絶句を流麗な筆致で記したもので、前述の荒木教授『島田藍泉伝』七十五頁にその全影が掲載されている。しかし、この受入印の年記は「島田家資料」のそれとは齟齬するので別筋の資料と思われる。このこと、あるいは旧分類名に誤りがあるのか、後考を俟つしかないが、確認のためこの一事を明記しておく。

次に、島田家資料のなかには、分類イ～ニの分類からは漏れる、明治期の資料が二十八点存在すること。これらは藍泉の孫で、『大日本校訂大蔵経』を刊行したことで知られる、明治の宗教学者・島田蕃根（みつね）に係わるものである。そのうち最も注目すべきと思われる『上宮聖徳法王帝説』影写本（一巻一軸）を紹介した、拙稿「『上宮聖徳法王帝説』の一影写本」（矢毛達之氏と共同執筆、「文献探究」第三十八号　平12・3）第三節に、その一覧表を掲出しておいた。詳しくは右拙稿に就かれたいが、「島田家資料」の来歴に係わる部分のみ略述しておくと、当然のことではあるが「島

図版―一

図版―二

田家資料」には一時期、蕃根のもとで整理保存されていた痕跡が見出される。片山鳳翩書簡に貼付された「南邨文庫」の蔵書票（**図版一一**）がそれで、蕃根の八十の賀を記念して刊行された『島田蕃根翁』（明治四十一年刊、島田蕃根翁延寿会編）によれば、「南邨文庫」は蕃根の遺愛の書籍を集めた文庫名であることが確認される。また**図版一二**の黄道符詩稿（目録番号86）に捺される蔵書印「島田／蔵書」（朱文陽印）は蕃根のものであるか確定できないが、島田家で用いられたものとして参考までに掲出しておく。その外、書簡の差出人名を、端裏にあるいは付箋に書いて貼付けたものも散見され、これも恐らく蕃根の手によるものと思われる。かく、蕃根のもとで整理保存された時期に前述のような明治期の資料が混入されたのである。

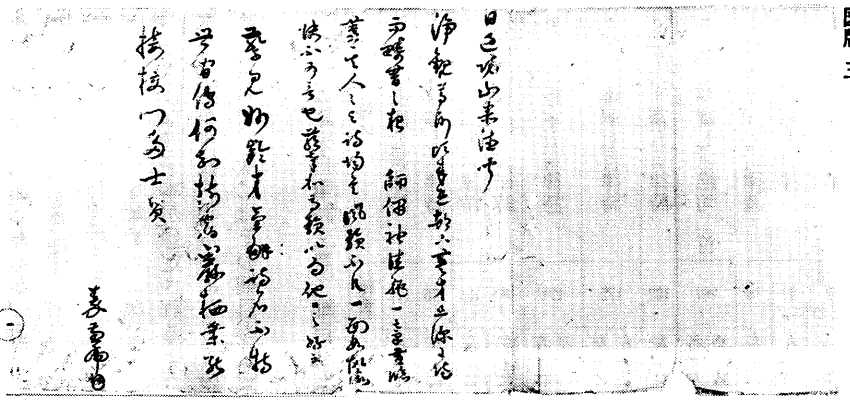
以上、主として図書室の分類に照らしながら、「島田家資料」の問題点を述べた。これらを総合すれば、藍泉の遺物と藍泉の追悼詩が孫の蕃根に引き継がれ、その段階で蕃根に係わる資料が混入し、本稿冒頭に掲げた**イ～ホ**のような資料群が形成されている、ということになろう。従って資料の性格を考慮すれば、藍泉の遺物には「詩文箋部」「書簡部」、詩文箋・書簡以外のものを集めた「雑部」、さらに藍泉の没後に付加されたものに「藍泉追悼詩部」、「島田蕃根旧蔵資料部」という分類を与えるのが妥当かと思われる。

三　巻子本復元

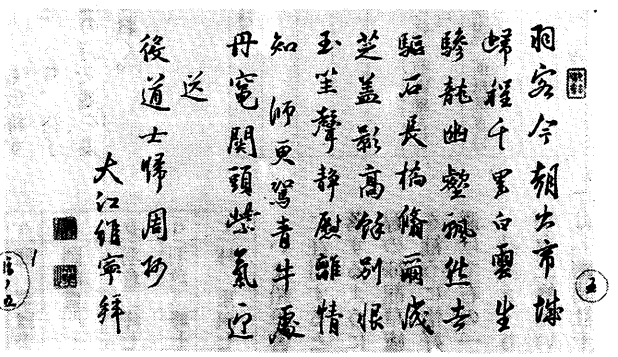
最後に、資料伝存に関する問題点をいまひとつ指摘しておきたい。一見、それぞれ独立するかたちで存在するかに見える詩文箋であるが、もと巻軸装であって後に切断されたと思われるものが相当数認められる。詩文箋の左端下方に漢数字の番号が墨筆あるいは鉛筆で書かれるものがそれである。

これら番号が巻軸中の配列を示すものであったことは、例えば左端下方に「一」と墨書される嘉兼虎詩箋（目録番号11）に見返し部分がそのまま残る例（**図版一三**）、あるいは大江維寧詩箋（目録番号172）のように、右端に残った前紙との継目下方に少し切れ掛かった「五」、また左端下方に「後ノ五」との墨書が残る例（**図版一四**）から知られる。更には、別の維寧詩箋（目録番号171）には左端下方にかすかに墨痕が残るが（**図版一五**）、これが**図版一四**右端下方の「五」字にぴったりと符合する例までもがある（**図版一六**）。恐らく、墨筆の番号は巻軸装にしようとした当時の覚書のためのもので、のち裏打を施すために切断した際に、もとの配列を書き留めようとしたか何かの理由で書かれたのが鉛筆書の番号であろう。それが現状のように他の詩文箋と混在している訳である。切断の具合によって僅かに墨痕のみを残し、その漢数字が判読不能になっているものも多くあり、従って総てに亘り巻子本を復

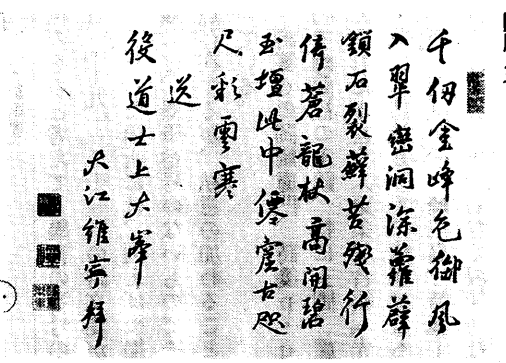
図版一三



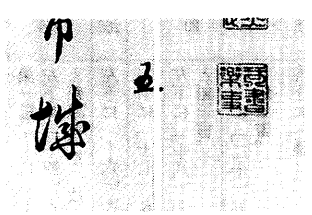
図版一四



図版一五



図版一六



元することは困難であるが、番号の連鎖の具合、および各人物の文芸圏などを考慮すると、およそ〔京坂諸儒自筆詩文巻〕、〔周防諸儒自筆詩文巻〕、および亀井南冥・昭陽・曇栄など亀井家の詩文を集めた〔亀井家自筆詩文巻〕とでも仮称すべきような巻子本が想定されるように思われる。うち、巻子本の全容が比較的明らかにしうるのが京坂諸儒の詩文箋を集めたもので、次にはその細目の私案を掲出しておく。

〔京坂諸家自筆詩文巻〕細目私案一覧

	詩文箋名	目録番号	墨・鉛筆書番号、備考
a	大江玄圃七言律詩	177	左下に「一」と墨書。
b	大江玄圃七言律詩	176	左下に「二」と墨書。
c	大江藍田七言律詩	181	左下に「三」と墨書。
d	大江藍田七言律詩	180	左下に「四」と墨書。
e	大江維寧五言律詩	171	左下に墨痕あり、fに残る前紙継ぎ目左下の「五」字と符合。
f	大江維寧七言律詩	172	左下に「後ノ五」と墨書。前紙継ぎ目左下に「五」と墨書。
g	細合半斎五言律詩	102	左下に「六」と墨書。
h	龍　草廬七言絶句二首	267	各々左下に「七」「八」と墨書。※二枚の詩箋を一枚に裏打。
i	葛　子琴七言律詩	16	左下に「十」と墨書。
j	今井重憲五言律詩	97	左下に「十一」と墨書。
k	篠崎三島七言律詩	132	左下に「十二、十一」と鉛筆書、「十二」と墨書。
l	頼春水七言律詩・葛子琴五言律詩	255	第一紙左上に「十三」と墨書、第二紙左下に「十四」と墨書、「十三、十四」と鉛筆書。※二枚の詩箋を一枚に裏打。
m	龍　草廬七言絶句	266	左下に「十六」と墨書。
n	龍　草廬書簡	—	左下に「十七」と墨書。
o	岡崎盧門七言絶句	80	左下に「十八」と墨書、「十七十八」と鉛筆書。
p	羽倉三峰七言絶句五首	4	左下に「二十」と墨書、「十九二十」と鉛筆書。
q	羽倉三峰七言絶句	5	左下に「後ノ二十」と墨書。
r	林　東溟七言絶句	269	左下に「二十ノ二」と墨書、「二十二」と鉛筆書。

いま鉛筆書の番号は後世のものと考えて、墨書の番号のみに注目すると、「九」「十五」「十九」「二十一」の詩文箋が欠落するように解せられる。こうした箇所には、例えば後掲目録の268龍草廬七言絶句詩箋など、墨筆番号のないものでそれを補うに恰好のものも数点存在するが、私意の加わることを避けて右の一覧表には省いている。

詩箋a・bの大江玄圃、詩箋oの岡崎盧門、詩箋p・qの羽倉三峰はいずれも草廬門で幽蘭社の重鎮、特に玄圃、盧門は「幽蘭社十才子」に数えられたと言う（東条琴台編『先哲叢談続編』）。詩箋c・dの藍田、詩箋e・fの維寧はともに玄圃の男。詩箋gの細合半斎、詩箋kの篠崎三島、詩箋i・lの葛子琴、詩箋lの頼春水は、言うまでもなく混沌詩社の重鎮である。詩箋jの今井重憲は、近世文芸叢刊第八巻『浪

華混沌詩社集』（般庵野間光辰先生華甲記念会編　昭44）所収の『葛子琴詩抄』『葛子琴詩』に唱酬相手としてその名が見え、混沌詩社関係者の歳旦詩集『花魁風什』にも一首入集する。混沌詩社周辺にあった人物であろう。このように見てくると、この巻子本はもと、幽蘭社、混沌詩社など、藍泉が京坂において唱酬した詩箋を集めていたことが明らかである。墨筆番号に注目して配列すると、同日の作が並ぶ場合もあり、各々の詩箋を別個に見るときより、資料相互の関連性や詩が賦された際の雰囲気を一層鮮明に窺い知ることができる。資料の原態を保存するという意味においても、以上のような考察を経て巻子本のかたちに復元することが必要ではないかと考える。猶、これらの内、詩箋g・i・j・lなどの混沌詩社社友のものは、前述の拙稿「古文辞流詩学の残照」に図版とともに詠作年時を考証して紹介しておいた。併せて参照されたい。

「島田家資料」目録稿

《凡例》

一　本稿は、九州大学附属図書館蔵の「島田家資料」の目録である。

一　資料の性格を鑑み、全体を「詩文箋部」、「島田藍泉追悼詩部」、「書簡部」、「雑部」、「島田蕃根旧蔵資料部」の五部に分かち、紙幅の都合、本稿では「詩文箋部」のみを報告する。

一　資料名は、作者氏名と、詩の場合はその形式名、文の場合はその題名とを併せたものとする。その際、一枚の紙に二首以上の詩・文が書かれる場合に限り、資料名の後にその数を続けて記す。従って、その数を記さないものは、一枚の紙に一首の詩・文が書かれていると解されたい。

一　作者氏名は、原則として署名の表記を採る。但し一般的な呼称に改めた場合もある。また、僧侶には氏名の後に（僧）と記す。

一　配列は、作者氏名第一字の音読みを基準とした五十音順とする。同一音のなかでは、第二字の、また、二枚の紙を一枚に裏打ちするものについては、一枚目の作者氏名を基準とする。但し、署名のないなどの理由から作者氏名の判明しないものについては、「無名氏」として最末尾に掲出する。

一　記載事項に関しては、次のような方針を採った。

・「資料名」を見出しとし、以下「形状」、「備考」を基礎情報とする。

・備考欄には、詩題、詩序、詞書など、それぞれの詩歌が詠まれた状況を把握するために参考となるものを主として記す。

・資料に墨筆または鉛筆書の番号が残る、もと巻軸装であったと思われるものに関しては、資料名のうえに●印を付す。

1 安芸源績七言律詩　一紙一枚「寄徳山教学院道甫」。
2 以哉坊発句　一紙一枚「三五の清光は防の山口にその風興をつくし立待ゐまちのながめは長の船方へ吉田のほとりにさまよひ侍るに安倍何がしの家は其意窟主のゆかりあるよりさいはゐ筑紫の見おくりながら爰にあるじまふけして今宵の影にあそべよとはひたぶるその信の薄からざるに杖をとゞめて羇旅に道情を休るの一助ともいふべし(ヤブレ)」。
3 伊東宣□七言律詩　一紙一枚「観成堂落成卒賦賀」。破損。
●4 羽倉三峰七言絶句五首　一紙一枚「送周防役道士遊洛因入金峯」。
●5 羽倉三峰七言絶句　一紙一枚「右送藍泉子帰周防」。
6 云々斎九峰七言絶句　一紙一枚「文化己巳秋始謁藍泉先生因賦野詩奉呈」。文化六年秋詠。
7 永事白七言絶句　一紙一枚「奉呈藍泉先生」。
8 永富充国七言古詩　一紙一枚「右賦奉詠彩石園主公藍泉道士」。
9 円成(僧)五言律詩　一紙一枚「藍泉先生遊京師于時予亦東帰逾追而相値不日帰郷因賦一律送別以寄懐故」。
10 桜寿礼詩草稿　一紙一枚「寄懐藍泉先生」「前雪夜座　狭山侯臣陰豊州会席」「秋江晩釣　仲山服氏宿題」など五首。
11 嘉兼虎七言絶句　一紙一枚「日過訪山泰徳聞浄観尊師頃来遊都下英才思深爾侍而疇昔之夜師偶袖佳絶一章賁臨蓋其人々与詩均是風韻不凡一面如古諭快不可言也茲奉和高韻以為他日之好書」。
12 快発(僧)七言絶句　一紙一枚「右遊残月楼呈藍泉道士」。
13 覚原子七言古詩　一紙一枚　破損。
14 楽康済五言絶句　一紙一枚「示同舟客」。
15 楽斎子詩草稿　一紙一枚「訪富中達国手叟」など三首。
●16 葛子琴七言律詩　一紙一枚「己亥仲秋雨夜頼千秋有遅藍泉道兄不至因次千秋韻賦此時道兄帰舟阻雨正之」。安永八年八月詠。
17 貫元愷七言絶句　一紙一枚「乙丑四月十日奉訪藍泉先生瑶池舘席上邂逅縣君文祥田君恭美歓酌之餘賦呈」。文化二年四月詠。
18 館林遠七言絶句　一紙一枚「元日」。
19 館林遠七言絶句　一紙一枚「雪夜吉武子礼至有詩見贈和謝」。
20 館林遠七言律詩　一紙一枚「立春途上作」。
21 亀井昭陽五言古詩　一紙一枚「奉寄藍泉役先生」。
22 亀井昭陽七言律詩二首　一紙一枚「奉寄役先生二首」。
23 亀井南冥五言古詩　一紙一枚「遊魚観性」。
24 亀井南冥五言古詩　一紙一枚「送公族博雅大夫之東都」。色刷詩箋。
25 亀井南冥五言古詩二首　一紙一枚「重別水永遊五島四十五(以下破れ)」「送永生以人生之別難為韻呈之」。破損。

●26 亀井南冥古詩　一紙一枚　「独流編書賦」。色刷詩箋。

●27 亀井南冥古詩　一紙一枚　「宿華岡憶前遊不寐偶然詩成書贈徳山諸君子」。

28 亀井南冥五言絶句　一紙一枚　「詠杯」。

●29 亀井南冥五言絶句五首　一紙一枚　「擬明劉誠意五絶句」。詩後註「往日西郊藍輿中得薄録呈藍川(ママ)役詞宗案下伏乞評教」。

30 亀井南冥五言律詩　一紙一枚　「盃」。署名無きも筆跡より南冥詩と見る。

31 亀井南冥五言律詩　一紙一枚　「呈処士陽秋来情話三日賦此謝之」。

32 亀井南冥五言律詩　一紙一枚　「哭藍泉役学士」。色刷詩箋。包紙あり。包紙墨書「哭／藍泉先生詩　亀井魯敬草」。

33 亀井南冥七言絶句二首　一紙一枚　「寄懐無是公二首」。寛政七年八月詠。

●34 亀井南冥七言絶句　一紙一枚「苞楼望」。詩後註「戊午夏六月書贈藍泉先生災後第二百有七十四」。寛政十年六月詠。

35 亀井南冥七言絶句　一紙一枚　「往日余疾病時児昱留学徳山帰則疾愈有感卒然成詠謝呈藍泉役公」。寛政三年六月詠。

36 亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「読無是公之詩有感次韻」。寛政七年二月詠。

●37 亀井南冥七言律詩二首　一紙一枚　「右二首寄懐藍泉役君」。

●38 亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「和謝藍泉役文学見賀進秩」。

39 亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「和呈役学士」。色刷詩箋。

40 亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「江上偶興有懐藍川(ママ)先生」。寛政十一年十一月詠。

41 亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「獲役教授与松飯二子談及予旧事同賦見贈之以読之慨然次韻却寄」。

42 亀井南冥七言律詩　一紙一枚

43 亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「奉送秋月君侯述職東都」。色刷詩箋。

●44 亀井南冥七言律詩二首　一紙一枚　「右奉和藍泉先生之瑶韻」。

45 〔亀井南冥・昭陽・曇栄詩巻〕一巻一軸　新表装。

①亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「児昱文学大進知有得乎周南数日之遊賦之寄謝藍泉役公」。寛政三年十二月詠。

②亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「寄懐藍泉先生」。享和三年十一月詠。

③亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「次韻役子山中作却寄」。

④亀井南冥七言律詩　一紙一枚　「読藍川(ママ)役文学四十七士墓下作有感賦此副其意」。

⑤亀井南冥古詩　一紙一枚　「秋月宮大夫贈其土宜薯蕷曰祝歳抄賦以謝呈」。

⑥亀井南冥七言律詩二首　一紙一枚　「夜猿啼」「寄遠林」。

⑦亀井南冥古詩　一紙一枚　「送祇役東都人」。色刷詩箋。

⑧曇栄七言律詩　一紙一枚　「次韻役君藍泉和辺茂学之什却寄」。

⑨亀井昭陽七言絶句　一紙一枚　「次韻無是公感興」。
寛政七年二月詠。
⑩亀井昭陽七言絶句　一紙一枚　「奉贈藍泉役先生」。
⑪亀井南冥五言詩　一紙一枚　「奉謝羽東海君賜物」。
⑫亀井昭陽七言律詩　一紙一枚　「奉寄藍泉役先生」。

46 亀井南冥「右寄懐藍川(ママ)役詞宗」一紙一枚。
47 亀井南冥撰「贈肥学生宮君彝叙」一紙一枚
48 亀井南冥撰「読大道公論」一紙一枚
49 喜等七言律詩　一紙一枚　「右冬夜少闌藍泉老兄之書堂」。
50 菊舎発句　一紙一枚　「藍泉先生のもとを初て訪ひ侍りはる
ひの長唱に時をうつして」。
51 菊坡野逸七言絶句　一紙一枚　「化午除日」。色刷詩箋。
52 吉富関帰七言律詩　一紙一枚　「奉呈藍泉先生左右」。
53 臼杵鹿垣五言律詩　一紙一枚　「雨後郊行　得舒字」。色刷詩
箋。
54 臼杵鹿垣七言絶句　一紙一枚　「春日漫作」。色刷詩箋。
55 臼杵鹿垣七言絶句　一紙一枚　「右西帰便道走謁神戸侯〻賜
別宴賦此奉呈」。色刷詩箋。「御芳名存不申候。御赦免
奉希候」との付箋あり。
56 臼杵鹿垣七言律詩　一紙一枚　「奉寄懐藍泉先生」。
57 臼杵鹿垣詩草稿　一紙一枚　「奉呈藍泉先生」など三首。
58 臼杵鹿垣詩草稿　一紙一枚　「己未元日」「奉和姫路侯春日
別業雑興」など五首。寛政十一年頃詠。
59 九百道人七言絶句　一紙一枚　「美人睡起」。
60 虚白主人七言律詩　一紙一枚　「聞役君臥病予亦近有賎恙賦
寄懐」。
61 恭垣陳人七言絶句　一紙一枚　「広陵留別諸君」。

62 脇憲七言律詩　一紙一枚　「右奉贈徳府教授藍泉先生玉案
下」。
63 慧日（僧）七言律詩　一紙一枚　「右寄役観賢兄」。
64 慧日（僧）七言律詩　一紙一枚　「右和役観賢兄春暁聞鶯」。
65 玄礥五言律詩　一紙一枚　「右奉呈教学院主藍泉上人」。
66 玄礥五言律詩　一紙一枚　「冬日訪藍泉道人此日他適不在因
而一律聊以代鳳草」。
67 源元禎七言律詩　一紙一枚　「惟寛政甲寅春三月丁酉奉拝観
皇后冊立後三日自上皇仙宮入内法駕」。寛政六年三月
詠。
68 源元禎七言律詩　一紙一枚　「暮春芙蓉楼集　得飛字」。
69 原古処七言絶句　一紙一枚　破損。
70 源正宣七言律詩　一紙一枚　「右奉呈藍泉役公」。
71 源知詩断簡　一紙一枚　「托栗玄厚遊徳府奉寄懐藍泉夫子」。
署名の部分のみ残る。色刷詩箋。
72 原田亮七言律詩　一紙一枚　「曩辱此中秋先生之京師遂照臨
草廬令命景慕依々」。
73 原田亮七言律詩　一紙一枚　「奉呈藍泉老先生」。
74 姑射一如七言律詩　一紙一枚　「右仲秋前一夕集酔月楼席上
留別興山役君」。
75 古南林茂廉七言律詩　一紙一枚　「梅花屋席上送松丘象甫
君帰郷兼奉寄藍泉先生得八斉」。
76 呉梅処七言律詩　一紙一枚　「為巴教授寿其古稀人六十初
度」。
77 宏七言律詩　一紙一枚　「聴雨斎集送洞海尊者之広陵分韻」。
破損。
78 高允中七言絶句　一紙一枚　「右奉呈藍泉道士」。

79 光雲七言絶句　一紙一枚　「右謹奉呈教学院主上人」。

●80 岡崎盧門七言絶句　一紙一枚　「右送藍泉役錬師帰周州」。

81 好古七言律詩　一紙一枚　「聴雨斎送洞海禅師之広陵分韻」。

82 恒山七言律詩　一紙一枚　「寄懐役藍泉道君」。

83 黄道符五言律詩　一紙一枚　「寄贈藍泉役君」。

●84 黄道符七言絶句　一紙一枚　「送藍泉役君還周防」。色刷詩箋。

85 黄道符七言律詩　一紙一枚　「席上賦贈興山道士得十真」。

86 黄道符詩草稿　一冊　墨付七丁。紙縒綴。識語「右五日間作通計四十三首録上藍泉役君文机／紫洋黄道符孟瑞氏再拝」。蔵書印「島田／蔵書」（朱・陽）あり。

87 江彬七言絶句二首　一紙一枚　「右二章奉賺浣渓秀才之京城」。

88 岡武俊文草稿　一冊　墨付二丁。紙縒綴。「観楽舞賦序」。寛政九年夏撰。

●89 国常棣七言絶句　一紙一枚　「浄観師携詩見過園和其韻」。

●90 国常棣五言律詩　一紙一枚　「寄浄観師」。

91 谷忠敬七言絶句　一紙一枚　「奉和除夜作」。詩序「前日辱示高作感吟数篇如在一堂上親聞大雅之音鄙恪頓銷感佩何罄余不佞不眷巴調強為次韻立春作併呈上伏請斧正不一」。色刷詩箋。

92 谷忠敬七言律詩　一紙一枚　「浪華立春」。色刷詩箋。

●93 国島京山七言律詩　一紙一枚　「右同賜崇東山二君奉訪藍泉役公席上同賦得魚字」。

●94 国富彦章七言絶句　一紙一枚　「奉送右京道士遊金峯山」。

95 国富彦章詩草稿　一紙一枚　「叢桂院賞十六夜月」「竹飲積翠園集」など三首。

96 崑岡山人五言律詩　一紙一枚　「徳山府葵園集奉寄興山役公」。

97 今井重憲五言律詩　一紙一枚

98 今井重憲七言律詩　一紙一枚　「奉和道甫賢兄瑶韵」。色刷詩箋。

99 佐々木龍原七言律詩　一紙一枚　「右奉送浄観道人帰徳山兼奉憶国増二君」。

100 佐直七言律詩　一紙一枚　「右月夜憶山中」。色刷詩箋。

101 佐藤忠篤七言律詩　一紙一枚　「右始而把紙筆強呈鳳館祭酒藍泉先生」。

102 細合半斎五言律詩　一紙一枚　「役道甫君初来見即告別因贈」。色刷詩箋。

103 斎藤高寿「義記」　一冊　墨付七丁。紙縒綴。

104 三河本鞏五言律詩　一紙一枚　「呈藍泉役詞宗」。

105 三橋七言絶句　一紙一枚「孤雁」。

106 山県習七言律詩　一紙一枚　「次観公答井尻生韻却奉寄」。色刷詩箋。

107 山口豊七言律詩　一紙一枚　「右京師邂逅藍川（ママ）役先生賦此奉贈」。

108 山口豊七言律詩　一紙一枚　「送別周南柳士徳帰省萱堂兼祭先考」。

109 山根南溟五言絶句　一紙一枚　「序上有詩戯次高韻奉酬」。

110 山根南溟七言絶句　一紙一枚　「右卒爾次韻藍川（ママ）師恵詩寓惜別之意云爾」。

111 山根南溟七言律詩　一紙一枚　「右浄観公二三年前訪余周府郷校与遊佐山人林亭山人已逝来詩及之誦之不勝感言次来韻奉和答」。

112 山根南溟七言律詩　一紙一枚　「送浄観君帰徳山」。
113 山根南溟七言律詩　一紙一枚　「右徳山藍川君訪予周府郷学喜賦此」。
114 山根南溟七言律詩　一紙一枚　「次浄観君恵贈韻奉酬」。
115 杉山三関七言律詩二首　一紙一枚　「奉寄懐藍泉先生」。
116 杉山三関七言律詩・三川大中七言律詩　二紙一枚　【杉山】「藍泉先生席上」、【三川】「奉呈藍川師」。一枚に裏打ち。
117 山川虚七言絶句五首　一紙一枚　「奉寄懐藍泉老夫子」。文化二年秋詠。
118 山川虚「送雪渓国文学序」　一紙一枚　破損。
119 山川蒙「送江軍帰藩序」　一紙一枚　文化三年十一月撰。
120 山豹七言律詩　一紙一枚
121 山宝如斎五言律詩　一紙一枚　「留別」。
122 思玄山人七言律詩二首　二紙一枚　「右重陽前一日奉呈藍泉先生」。一枚に裏打ち。
123 紫衆本寒七言絶句　一紙一枚　「戊戌秋痩癘大乃余病将死盟友役道人祷祠有験御蘇喜賦奉呈」。色刷詩箋。安永七年秋詠。
124 若月太中七言絶句三首　一紙一枚　「文甫遊徳山訪藍泉道士道士者聞人雅好文予欽英風数十年未得一目撃偶因文甫承高意致語恋〻殆如旧相識中也謝劣草野一隋夫垂顧之厚何其如此乎喜愧交集不知所言聊裁三絶祇茲為謝云三首」。
125 守屋武七言律詩　一紙一枚　「奉呈藍泉先生伏祈郢斤」。
126 守屋武七言律詩　一紙一枚　「初謁藍泉先生且請瑶篇伏而読之卒業嘆曰有是哉吾師也洙泗正脉菱園正統当今世捨先生其誰也遂奉一律執弟子礼云」。
127 秋山光彪和歌二首　一紙一枚　「後正月初つかた筑紫大宰府にまかる途中にて」「同十日余り九日雪のいたく降りければ」。
128 重富礼七言絶句　一紙一枚　「右奉寄藍泉先生」。
129 重富礼七言律詩　一紙一枚　「遊徳城奉呈藍泉先生」。
130 出田知七言絶句二首　一紙一枚　「右奉送浣溪秀才之京都」。
131 蕉雨七言絶句　一紙一枚　「荷亭暁坐」。天明三年九月詠。
●132 篠崎三島七言律詩　一紙一枚　「中秋前一夕同諸子飲春水南軒会藍泉子至分韵八斉」。
●133 小国玉淵七言絶句　一紙一枚　「奉呈藍泉先生」。
●134 小国玉淵七言律詩二首　一紙一枚　「寄役道士藍泉先生」。
135 小国玉淵詩草稿　一冊　墨付十二丁。紙縒綴。
136 小国玉淵「詞林管見」　一冊　墨付十二丁。紙縒綴。
137 象水五言律詩　一紙一枚　「唱平家曲有感」。色刷詩箋。
138 蕉中・曇栄宗曄・服部仲山詩草稿　一紙一枚　「甲寅閏月五日豪潮尊者自遊崎江帰見過草廬卒賦奉贈落句余疇昔夢中所得因用之」「送安達道士」など九首。横折。寛政六年頃詠。
139 松亭亮七言古詩　一紙一枚　「右春日偶来」。色刷詩箋。
●140 乗洲七言絶句　一紙一枚　「賦一絶贈寄肉筆数学道士以請題天下正画」。
141 織田驥七言絶句　一紙一枚　「平安客舎奉送藍泉役公遊金峰公御著有大道公論故及」。色刷詩箋。
142 織田驥七言絶句二首　一紙一枚　「同藍泉役公訪滄洲赤松翁席上分韻賦二絶一則呈藍泉一則呈滄洲〻〻長余四十

四歳故転句及之」。

143 織田驥七言律詩　一紙一枚　「追悼昨非翁」。色刷詩箋。

144 織田驥七言律詩　一紙一枚　「右贈黒文伯」。

●

145 心賢（僧）七言律詩　一紙一枚　「次韻藍泉君見贈栄公却奉寄藍君」。

146 井一貫七言律詩　一紙一枚　「右奉次藍泉先生見送余遊筑高礎」。

147 井上瀋城七言絶句　一紙一枚　「奉贈藍泉大道士」。色刷詩箋。

148 石威臣七言絶句　一紙一枚　「奉贈藍泉左先生」。色刷詩箋。

149 赤松桂海五言絶句　一紙一枚　「藍泉詞主有詠予画松之作見贈奉攀其韻酬恵意」。

150 赤松桂海七言律詩　一紙一枚　「丙寅初夏同南紀林子直北若吉土察泛舟賦示二子」。文化三年四月詠。

151 川合黄薇七言絶句　一紙一枚　「藍泉先生子温佐谷君見訪予平安客舎因喜賦呈」。

152 川合黄薇七言律詩　一紙一枚　「奉和藍泉役先生見贈韵送公上金峯山兼通路湯謁聖護院」。

153 浅直方七言絶句三首　一紙一枚　「右奉送興山道人之京」。

154 川貞七言絶句　一紙一枚　「右華表松」。

155 蔵七言律詩　一紙一枚

156 薮孤山七言絶句　一紙一枚　「舟泝桂川」。

●

157 倉実文　一紙一枚　「右今春浄観道人来自徳山淹留都下忽有回山之志不堪銷魂之情賦此餞送」。

158 宗正淳徳七言律詩　一紙一枚　「右和呈周陽右京師登黒滝山」。

159 増野虎八七言律詩・中島覚七言律詩　二紙一枚　「奉留別藍泉先生」。一枚に裏打ち。

160 増野虎八七言古詩　一紙一枚　「右藍泉先生之席上分韻得花字」。

161 郇岡素七言律詩　一紙一枚　「丙午歳晩書感」。天明六年十二月詠。破損

162 村充実五言律詩　一紙一枚　「右徳山阻雨不得還郷余無済勝之具亦不得訪藍泉先生賦之奉贈請慈斧」。

●

163 村充実七言律詩　一紙一枚　「右奉寄藍泉道人」。

●

164 村上飛七言絶句　一紙一枚　「送浄観道人帰郷」。

165 村上彦詩文草稿　一冊　墨付四丁半。紙縒綴。外題「拙稿」。識語「拙稿一冊謹乞／鴻慈覧政／村上彦頓首九拝」。

166 村田清風七言律詩　一紙一枚　「右奉寄藍泉先生」。包紙墨書「村田清風翁書／幼名亀之輔後四郎左衛門と改順之は少年之時の名ナリ」、包紙付箋「吉田イフ／コノ題字ハ子爵品川弥次郎氏ノ筆蹟ナリト／村田峯次郎翁ノ話也」。また包紙裏に「この村田と云ふ人ハ長洲之村田ニハ無之哉。村田亀之輔と云ハ村田清風ナリ。村田峯次郎と問答すべし」と墨書。

167 村田琳七言律詩　一紙一枚　「右浪華奉送藍泉先生」。

168 奈古屋豊敬七言絶句　一紙一枚　「鄙絶一章述懐寄呈唯恐瀆電覧耳」。色刷詩箋。

169 奈古屋豊敬七言絶句二首　一紙一枚　藍泉を介して龍草廬に賛の執筆を依頼する旨を記す長文の序あり。

170 奈古屋豊敬七言律詩　一紙一枚　「和藍泉役詞宗見寄懐瑶韻却寄」。

●

171 大江維寧五言律詩　一紙一枚　「送役道士上大峯」。

●

172 大江維寧七言律詩　一紙一枚　「送役道士帰周州」。

173 大江維寧七言律詩　一紙一枚　「月夜宿須磨」。
174 大江維寧七言律詩　一紙一枚　「秋夜藍泉役君見訪得元韻」。色刷詩箋。
175 大江玄圃七言絶句二首　一紙一枚　「右二首七夕暁」。色刷詩箋。
●176 大江玄圃七言律詩　一紙一枚　「送役道士還周州」。
●177 大江玄圃七言律詩　一紙一枚　「送役道士登太峯」。
178 大江玄圃七言律詩　一紙一枚　「分題賦平刑部忠盛」。
179 大江玄圃七言律詩　一紙一枚　「藍泉役君見訪　得侵韻」。色刷詩箋。
●180 大江藍田七言律詩　一紙一枚　「送役道士還周州」。
●181 大江藍田七言律詩　一紙一枚　「送役道士登太峯」。
182 大江藍田七言律詩　一紙一枚　「詠茶烟」。
183 大江藍田七言律詩　一紙一枚　「夏日登芳野山」。
184 大江藍田七言律詩　一紙一枚　「藍泉役君見訪得思字」。色刷詩箋。
185 大錐（僧）七言絶句　一紙一枚　「春日遊教学院奉呈藍泉大法主」。
186 仲覚七言絶句　一紙一枚　「奉寄懐藍泉先生」。
187 仲覚七言絶句　一紙一枚　「奉寄懐藍泉老先生」。
188 忠寛七言絶句　一紙一枚　「中洲納涼」。
●189 中島覚七言律詩　一紙一枚　「右奉呈藍泉先生」。
190 中島覚七言律詩・西田顔彝七言律詩　二紙一枚　「訪藍泉先生奉次見示高韻伏祈雌黄」。一枚に裏打ち。
191 超宗（僧）銘草稿　一紙一枚　寛政五年頃撰。破損。
192 長□（ヤレ）七言律詩　一紙一枚　「奉寄懐藍泉先生」。色刷詩箋。破損。
193 荻野之恒七言律詩　一紙一枚　「奉謁藍泉先生」。
194 田寛七言律詩　一紙一枚　「藍泉先生見訪川合君客舎適余亦寄寓其舎初得結韻席上賦呈」。
195 田秀七言絶句　一紙一枚　「奉次藍泉先生瑶韻」。
196 渡辺豬五言古詩　一紙一枚　「呈役公藍泉」。
197 渡辺豬七言律詩　一紙一枚　「奉寄懐役道師藍泉」。色刷詩箋。
198 藤謙詩草稿　一紙一枚　「試毫　予時遠遊在防府西法精舎」など二首。
199 桐江漁史七言律詩　一紙一枚　「右春遊六首之一」。
●200 藤枝考養五言律詩　一紙一枚　「中秋前一夕喜諸君過飲分同元韻」。
201 滕龍七言絶句　一紙一枚　「右奉送浄観尊者帰郷」。破損。
202 洞海七言絶句　一紙一枚　「右呈藍泉先生」。
203 道済七言絶句　一紙一枚　「次前韻奉呈藍泉先生」。
204 洞仙「東雲舎の記」　一紙一枚　和文。末尾に発句あり。
205 曇栄宗曄五言律詩　一紙一枚　「武雄客舎」。
●206 曇栄宗曄七言律詩　一紙一枚　「右次韻藍泉役君聞奉倍加秩喜賦之佳什却寄」。
●207 曇栄宗曄七言律詩二首　一紙一枚　「右和答役君道甫見寄」。
●208 曇栄宗曄七言律詩二首　一紙一枚　「謝答藍泉役君見寄」。
209 曇栄宗曄七言律詩　一紙一枚　「依韻和平士敬大宰府秋望」。
210 曇海文草稿　一紙一枚　破損。
211 南渓詩草稿　一紙一枚　「右花月楼八景」。
212 念眠七言律詩　一紙一枚　「右草堂春雨／藍泉先生見過春雨賦之奉謝呈」。破損。

213 馬成七言律詩　一紙一枚　「奉呈長州教覚院聞公雖在于方外旁好儒学嫺文辞是以翺翔于詞林芸圃名声皦々震四方今也入国学以導引諸子弟実邦内所以矜式也予聞其高名久矣予宦遊往来于東都数十年無由接高範但為恨耳貴藩山田恭美遊学于弊藩今也帰郷故賦一律託以奉贈聊寓欽慕之意云爾」。

214 馬田仲莫七言絶句　一紙一枚　「謁教学院先生□(ヤブレ)兪攝衣□□(ヤブレ)不果賦詩寄懐」。破損。

215 筏道済七言律詩・七言絶句五首　一紙一枚　「右奉寄藍泉役先生」「右奉次藍泉役先生見贈井尻生高韻却寄」。

216 坂敬七言律詩　一紙一枚　「右奉送役浄観上大峰山」。

217 蛮州（僧）七言絶句　一紙一枚　「会孟真真師初遊防州浄観師且見其高作卒次芳韻賦呈」。

218 武久依七言絶句　一紙一枚　「右奉謁藍泉先生」。

219 武邨登々庵七言律詩二首　一紙一枚　「戊辰閏六月抵徳山避暑于松風館偶録客中旧作敢似藍泉先生清鑒」。文化五年閏六月詠。

220 福子龍七言律詩　一紙一枚　「右奉送別役藍泉先生入金峰」。

221 福豊宣七言律詩　一紙一枚　「右寄館下学士」。

222 福豊宣七言律詩・松下桜宇五言律詩　二紙一枚　【福豊宣】「右送藍泉君之京」、【松下】「右羆邑偶作」。一枚に裏打。

223 平田弘済七言律詩　一紙一枚　「徳山訪藍泉先生席上接縣文祥山恭華探得倫字文祥者周南之曽孫時為長藩助教」。

224 平田弘済七言律詩　一紙一枚　「徳府松岡翁松風館集分得看字賦奉呈席上諸彦聞翁有故裏足于東山向吾説其艱苦及一二」。

225 辺縛律七言律句　一紙一枚　「奉次韻藍泉先生贈示」。

226 辺縛七言律詩　一紙一枚　「右藍泉先生自金峯帰初会見示次韻奉贈」。

227 辺縛七言律詩　一紙一枚　「右奉贈原林二君」。

228 辺縛七言律詩二首　二紙一枚　一枚に裏打ち。

229 辺縛詩草稿　一紙一枚　「次林文実韻贈示」など五首。

●

230 法海（僧）七言律詩　一紙一枚　「呈役藍泉道士」。

231 法憧（僧）七言律詩　一紙一枚　「周南道中訪藍泉師賦呈分得風字」。

●

232 鳳来原瑾五言古詩・七言律詩二首　二紙一枚　「右奉呈藍泉役先生得春字併祈政」「奉寄呈周南役文学」。一枚に裏打ち。

●

233 鳳来原瑾古詩　一紙一枚　「奉留別藍泉役先生」。

234 鳳来原瑾七言律詩　一紙一枚　「右分韻得春字奉呈藍泉先生」。

235 法蘭（僧）七言絶句　一紙一枚　「送豪潮律師還肥高瀬」。

236 法蘭（僧）七言律詩四首　一紙一枚　「暘城帆大夫兄寄書詩因依其韻酬之」「三月五日遊篁淵」など四首。

237 法蘭（僧）・法海（僧）詩稿　一紙一枚　「寄題済南白雪楼」「寄懐南冥亀祭酒七首」など八首。破損。

238 本田真郷七言絶句　一紙一枚　「右月夜泛舟」。

239 本田真郷七言絶句　一紙一枚　「右浪華御号贈藍泉役兄」。

240 牧・椴両詠「同趙二十二詩張明府郊居聯句」　一紙一枚「十月晦日録」。

241 牧園茅山七言律詩　一紙一枚　「右寄呈徳府役文学」。

242 木啓七言律詩　一紙一枚　「奉別藍泉先生」。

243 渤海陳人七言古詩・福豊宣七言律詩　二紙一枚　【渤海】

「住吉町吟」、【福豊宣】「送藍泉先生往金峰」。一枚に裏打。

●244 妙琨（僧） 七言律詩二首 一紙一枚 「右次藍川（ママ）真人兄寄栄老師瑶韻却奉贈」。

245 鳴鶴五言絶句四首 一紙一枚 「題画以松下采芝為韻癸未新正奉初稿」。

246 名邨章七言絶句 一紙一枚 「奉送藍泉尊師之長安」。

247 名邨章七言律詩 一紙一枚 「席上卒賦奉呈藍泉先生」。

248 友山七言律詩 一紙一枚 「役君道甫見訪同賦」。

249 友山七言律詩 一紙一枚 「寄懐藍泉先生」。

250 友山七言律詩 一紙一枚 「酔諸君賜佳作」。

251 友山七言律詩 一紙一枚 「役君光訪有作次韻」。

252 友山七言律詩 一紙一枚 「会後賦寄謝藍泉先生」。

253 友山七言律詩 一紙一枚 「謝諸君来訪」。

254 余裕七言絶句 一紙一枚 「奉寄懐藍泉先生蜂帳下」。

●255 頼春水七言律詩・葛子琴五言律詩 二紙一枚 【春水】「南軒留諸賢同賦得覃韻」、【子琴】「八月十四夜拉藍泉道兄題頼南軒同諸子至贈」。一枚に裏打ち。

256 磊堂七言絶句 一紙一枚 享和二年詠。

●257 鸞台平章七言律詩 一紙一枚 「右謝観道人見贈」。

258 栗山献世五言古詩 一紙一枚 「奉呈藍泉夫子」。色刷詩箋。

259 栗山献世七言律詩 一紙一枚 「奉呈藍泉夫子」。

260 栗山献世七言律詩 一紙一枚 「奉寄藍泉大道士」。色刷詩箋。破損。

261 龍岡子七言律詩 一紙一枚 「教学観公届龍文精舎燈下作用高韻賦詠」寛政三年三月詠。

262 流州山人七言絶句三首 一紙一枚 「平安客中歳晩三首」。

●263 龍女貴七言絶句 一紙一枚 「早春湖城作」。

264 龍世文五言古詩 一紙一枚 「奉賀伊良子賢兄五十」。

265 龍晰子七言律詩 一紙一枚 「春晩教学院観公飯君正号見訪龍扉賦此聊鳴洲時値雨」。

●266 龍草廬七言絶句 一紙一枚 「右題水竹居」。

●267 龍草廬七言絶句二首 二紙一枚 「右夏日草堂作」「右鳧江晩涼」。色刷詩箋。一枚に裏打ち。

268 龍草廬七言絶句 一紙一枚 「右和城谷生贈韻」。破損。

●269 林東溟七言絶句 一紙一枚 「和徳山峯本大道士見贈韻」。

270 瀧鴻七言絶句 一紙一枚 「侍藍泉不至」。

271 和田東郭七言絶句二首 一紙一枚 「飛綸楼集分得雖字」など二首。

272 無名氏五言古詩 一紙一枚 「右次村七衛之韻奉懐藍泉道人」。破損。

273 無名氏古詩 一紙一枚 「奉和藍泉先生玉韻」。

274 無名氏五言律詩 一紙一枚 色刷詩箋。

275 無名氏詩草稿 一紙一枚

276 無名氏詩草稿 一紙一枚 断簡。

277 無名氏詩草稿 一紙一枚

278 無名氏詩草稿 一紙一枚 「奉寄懐全兄子哲」「送人登宝満」など四首。

279 無名氏詩草稿 一紙一枚 「哭根本翁并引」。破損。

280 無名氏詩草稿 一紙一枚 「送凌雲大夫」「贈素堂依唱和韻」「寄季徳又用前韻」など四首見ゆ。断簡。

281 無名氏詩草稿 一紙一枚 詩四首。

282 無名氏「送役道甫君之金峯山序」 一冊 墨付二丁。紙縒綴。

283　無名氏文草稿　一冊　墨付六丁。「与蘭汀師論文辞」「再与井公大」「遊錦浜記」など文三編、詩三首。紙縒綴。

〔付記〕「島田家資料」の整理・紹介の機会を与えて下さった、荒木見悟先生、柴田篤先生に深甚の謝意を表します。また貴重図書である、同資料の閲覧に当たっては、本学文学部図書掛長山田玄連氏の特別の配慮を得た、記して御礼申し上げます。

（おおば　たくや　九州大学大学院博士後期課程）